

平成 22 年 6 月 23 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：平成 19 年度～平成 21 年度
 課題番号：19730362
 研究課題名（和文） コンピュータ支援ツールを用いた知的障害のある人との協働アセスメント方法の構築
 研究課題名（英文） Development of collaborative assessment methods with people with intellectual disabilities by using the computer-assisted tool
 研究代表者
 西梅 幸治（NISHIUME KOJI）
 高知女子大学社会福祉学部・講師
 研究者番号：00433392

研究成果の概要（和文）：

本研究では、コンピュータ支援ツールを用いた知的障害のある人との協働アセスメント方法の構築を目指して、理論に基づく実践方法の具体化に向けて検討を行ってきた。まず理論的な側面については、知的障害のある人のエンパワメント実現に向けて、エコシステム視座と社会構成主義の考え方がその主な基盤になることを理解した。その理論的側面からの協働アセスメント方法と、アセスメント局面で活用可能なコンピュータ支援ツールの開発と利用方法について体系化を図った。

研究成果の概要（英文）：

This study aims at establishing the theory-based practice method of the collaborative assessment with people who have intellectual disabilities, using the computer-assisted tool in social work practice. At first, in order to materialize the empowerment practice with people who have intellectual disabilities, the theoretical framework were classified and analyzed to mainly consist of ecosystems and constructionist perspectives. By utilizing this framework and the computer-assisted tool developed, this study could promote to establish collaborative assessment methods including the use of it.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	600.000	0	600.000
2008 年度	500.000	150.000	650.000
2009 年度	500.000	150.000	650.000
年度			
年度			
総計	1.600.000	300.000	1.900.000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：ソーシャルワーク

1. 研究開始当初の背景

本研究は、「コンピュータ支援ツールを用いた知的障害のある人との協働アセスメント方法の構築」をテーマに進める。

知的障害のある人をめぐる近年の政策的動向としては、障害者自立支援法が2006年に施行されたことをあげることができる。この法整備により、障害のある人の自立を目指した地域生活と就労に関する支援の重要性が強調され、ソーシャルワーク支援方法にも大きな影響を与えている。障害者自立支援法のもとでのソーシャルワークには、特に地域生活など、よりトータルな生活支援の方法が求められ、そのためのアセスメント方法の構築が検討されなければならない。

このような支援を可能にするには、エコシステム視座に基づくソーシャルワーク、すなわちジェネラル・ソーシャルワークやジェネラリスト・ソーシャルワークと称される方法論の必要性が、現在、指摘されており、そのアセスメント方法に注目することが重要となる。なぜなら効果的なインターベンションの選択と最終的な支援結果がアセスメント局面の展開の仕方によって大きく左右されるからである(平山他 2005)。そのため本研究では、アセスメント局面に焦点化して検討していきたい。

これまでの研究経過で、利用者エンパワメントの観点から、ソーシャルワークにおけるアセスメント局面では、(1)生活をトータルにとらえるエコシステム視座、(2)利用者との対話、(3)その過程を展開する利用者との対話、(4)対話を促進するコンピュータ支援ツール、(5)コンピュータ支援ツール開発への利用者参加、などが重要であることを理解してきたところである。

2. 研究の目的

そこで本研究では、この経過をふまえ、コンピュータ支援ツールを活用した協働アセスメント方法の構築を目的として進めていきたい。具体的には、

- (1) 理論—利用者主体のアセスメント展開に向けての理論的視座(エコシステム視座、社会構成主義など)の整理と確立(生活をどのようにとらえるのか、アセスメント視点の確立)
- (2) 過程—利用者とソーシャルワーカー協働による過程展開の追究(利用者エンパワメントに向けた協働や過程の概念整理による協働アセスメント過程の展開構成の深化)
- (3) 技法—過程を展開する技法の明示(利用者とソーシャルワーカーの共通理

解や認識の差異の明確化を促進する対話などの手順の理解)

- (4) ツール—対話を推進するコンピュータ支援ツールの開発(開発段階からの利用者参加を図るとともに、よりアセスメント場面での協働を図ることができるシステム開発)
- (5) 検証—実践場面でコンピュータ支援ツールを活用したアセスメント方法の検証とその蓄積などとおして、理論構成を明確にしながら、社会福祉の実践現場で有効に機能するアセスメント方法論を構築していきたい。

すなわち本研究を通じて、ソーシャルワーク支援過程におけるソーシャルワーカー主導の展開を可能な限り利用者主導の展開へと移行しながら、実践に活用可能な具体的な方法論として昇華し、利用者のエンパワメントの一助とすることを目標としたい。

3. 研究の方法

研究方法については、協働アセスメント方法構築に向けての理論的整理とコンピュータ支援ツールの開発を視野に入れ、(1)文献研究、(2)コンピュータ支援ツールの改良、(3)論文執筆を行っていく。

具体的には、

(1) 文献研究

以下についての国内外文献の収集と研究による先行研究の整理と協働アセスメント方法、コンピュータ支援ツールの理論的背景の整理

- ① ソーシャルワーク理論(エコシステム視座、社会構成主義、アセスメント、エンパワメントなど)
- ② 障害者福祉(知的障害のある人をとりまく状況の理解)
- ③ コンピュータ支援ツールに関連する情報科学(特に数量化と計算方法への知識獲得、グラフ化、ビジュアル化に関する知識獲得)
- ④ 調査方法(インタビュー法やアンケート調査法など)

(2) コンピュータ支援ツールの改良

- ① 生活データを得るための質問項目作成に関する利用者、知的障害者関連施設に従事する職員などへのインタビュー調査に向けての資料収集と調査デザインの作成
- ② ツールを利用者との協働開発する手段・手順の整備
- ③ 質問回答項目の精緻化(質問項目間の関係性の検討などを通じた改良)
- ④ 知的障害のある人の興味や関心を高めるシンボルやアニメーションなどを用いた視覚的な生活理解を促進するためのツール改

良

⑤改良したコンピュータ支援ツールの知的障害のある人や現場職員への試用と検証の継続（知的障害のある人のコンピュータ利用、質問項目の信頼性と妥当性、視覚的な見やすさなどの使いやすさ、生活状況の把握のしやすさ、知的障害のある人と職員の対話のしやすさ、アセスメント、ケアマネジメント、個別支援計画への有効性）

（3）論文執筆

（1）、（2）を基盤とした学会発表や論文作成と公表にチャレンジすること

4. 研究成果

ソーシャルワークにおいて、利用者中心の姿勢はその契機より重要であったが、それを方法として具体化するためには、今日エンパワメント概念に着目することが不可欠である。エンパワメント概念は、今やソーシャルワークの中核となる理念として定着しており、その方法論を確立することが求められている。

また障害のある人の生活状況は、理念や制度、そして実践活動と関わり、（1）《視点》ADLからQOLへ、（2）《拠点》施設から地域へ、（3）《待遇》分離から統合へ、（4）《意識》差別から権利擁護へ、（5）《施策》保護から自立へ、（6）《実践》更生・援助から支援へ、と変化をしつつある。

特に専門家主導の援助に対して、障害のある人やその家族は、主体的な決定を活かした暮らしや、権利獲得を目指した当事者運動を展開するなかで疑問を投げかけてきた。特に1950年から1970年代のアメリカでは、アフリカ系アメリカ人による公民権運動、障害のある人による自立生活運動やセルフヘルプ運動など、差別を受けてきた人々が権利意識に目覚め、様々な権利の要求運動や当事者運動を活発に展開した。

そのなかで登場してきたエンパワメントは、まさに利用者主体のソーシャルワークに不可欠な概念ということができよう。そのエンパワメント概念の特徴を整理すると、以下の4点を主に指摘することができた。

- （1）人間：環境の枠組みで実践を展開すること（環境の改善を強調）
- （2）利用者のストレングスに焦点化し、利用者の認識や活動を重視すること
- （3）利用者ソーシャルワーカーが協働すること
- （4）実践活動の範囲を拡大し、マイクロからマクロまでを含むこと

しかしながらその課題は、理論的枠組み、すなわちperspectiveが未整理なことである。そこで本研究ではまず、エンパワメント実践

の中心なperspectiveを検討した。その結果としてエコシステムと社会構成主義が挙げられることを理解した。具体的に両者の特性としては、まずエコシステム視座について、

- （1）ソーシャルワーク支援の枠組みを提供できること
- （2）生活を構造と機能の観点からトータルに把握できること
- （3）生活の変容を時系列にとらえることができること
- （4）利用者と環境のマイクロからマクロまでの交互作用を理解できること

などの点で意義があるといえる。

また社会構成主義については、

- （1）利用者の生活に関する意味づけや認識を重視すること
- （2）利用者ソーシャルワーカーの関係性と協働に基づき生活状況認識を構成すること
- （3）利用者やソーシャルワーカーの自省（自己言及）に焦点をおくこと
- （4）利用者のストレングスに基づく意味の生成過程を強調すること

などの点で意義があるといえる。

この両者によってエンパワメントの理論的なフレームワーク、すなわち実践枠組みが形成されると考えられる。その主な特徴は、

- （1）生活理解における相互補完性（生活の構造・機能・意味の側面）
- （2）関係性における相互補完性（参加者の視点と観察者の視点）
- （3）過程における相互補完性（意味生成過程と状況変容過程）

から構成され、その包括統合化によってエンパワメント実践が説明可能になることが理解できた。

特に利用者ソーシャルワーカー協働で進めるエンパワメント実践過程は、例えばMileyら(2007)による対話、発見、発達の局面からなる過程に代表される展開である。そこでは従来の病理や問題の詳細、専門知識に重点をおいた展開ではなく、ストレングスや解決の探求、協働的パートナーシップに重点をおいた展開で、アセスメント局面についても、対話を通して実践される。

この協働アセスメント局面においては、生活を利用者、ソーシャルワーカーがそれぞれの視点から整理し、その差異に着目して把握していくことが重要となる。特にエンパワメントを促進するためには、一方で利用者ソーシャルワーカーが参加者の視点から対話を通じて生活の意味的側面からストレングスを生成し、他方で外在化による生活をトータルに観察する視点から、ストレングスを通して構造と機能を再構成する過程を重視する必要がある。それは未だ構造化されていない意味の部分からエンパワメントを目標に生活の再組織化を図る過程でもある。

生活の構造と機能の把握、利用者とソーシャルワークの生活への意味づけの違い、それらを通じた生活の変容をとらえていくためには、アセスメントツールが必要となる。そこで本研究では、エコシステム構想に基づくコンピュータ支援ツールに着目し、検討を行った。特にコンピュータ支援ツール活用は、以下の点で利用者とソーシャルワーカー協働によるアセスメントを促進する効果的なツールとなる。

- (1) 人と環境からなる生活を構造化することにより、生活の実像を生活の各要素とその関係性から理解できること
- (2) 生活状況に関するエコシステム情報の質問回答内容から、着眼した生活機能を処理し、その具体的な特徴をアセスメントできること
- (3) 生活状況のグラフ化・視覚化によって生活の全体関連状況が認識できること
- (4) 実践過程を通じた生活の変容を時系列で把握できること
- (5) これらを通じて利用者とソーシャルワーカーそれぞれの生活への認識とその差異について対話できること

この点については、社会福祉現場に従事するソーシャルワーカーを対象に太田 (2005) で作成された共通基本版コンピュータ支援ツールの質問項目を質問紙に起こし量的調査を行った。調査目的はツール質問項目の信頼性と妥当性に関して統計手法を用いて検証すること、さらには質問項目の構成や表現、回答しやすさなどについて活用者の実感を理解し、改良に役立てることである。

その結果をみていくと、太田ほか (2004 ; 2005) では今回の研究よりも生活状況理解への効果が高かった。理由としては、

- (1) 実践場面ではなく教育場面であったこと
- (2) 教育場面ではトレーナー (指導者) が存在し、活用方法などの解説を行っていること
- (3) 質問紙のみではなくそれとほぼ同様の質問項目を搭載したエコスキャナーを用いて検討していること

などが主に考えられる。特に (3) については、質問紙のみではなく改めてビジュアル化による視覚化の有効性が指摘できる。そしてその効果をさらに高めていくには、コンピュータ支援ツールの使い方を含めたソーシャルワーク支援における活用方法をトレーニングしていくことが重要であることを確認した。加えてこの調査によって同時に知的障害者版の信頼性・妥当性の検証の必要性とその調査デザインを作成することができた。

また知的障害のある人へのインタビューを通じて、その質問項目に反映していく作業

を行ったツールの概要と改良経過は次の通りである。利用者の論理で再構成された項目を、生活の諸要素とその関係性が安定的に維持されるパターンを示すように配置、生活を人と環境の各側面から分類・整理することを通じて、部分から全体までを系統的に構成した。そのシステム構成の結果は、まず

- (1) 包括・統合的な実体としての生活から、
- (2) 領域として自分と環境とに2分割し、それを (3) 分野として特性・基盤・周辺・支援とに4分割した。またそれらを (4) 属性として個性・能力・スキル・活動・身の回り・身近な人・支援者・サービスに8分割し、さらに生活の (5) 内容を32分割していき、ミクロからマクロにわたる生活内容の指標として配列した (図1)。

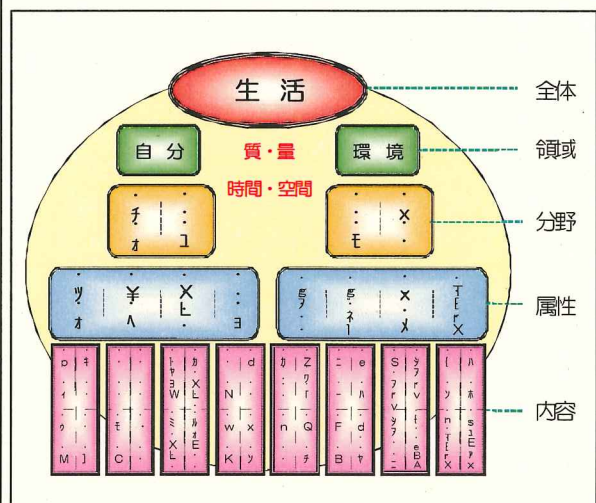


図1 生活の構造化

項目名には利用者との協働による活用を意識して、知的障害のある人に理解しやすい言葉で、できるだけ整理を試みた。さらに実際の画面表記は可能な限り平仮名や片仮名で示すことにした。さらに32項目の内容特性を示す指標の各下位にそれぞれ、その項目を明らかにする質問と回答選択肢を付加していった。その質問は、ソーシャルワーク実践構成要素である、価値・知識・方策・方法に対して、それぞれ知的障害のある人のエンパワメントの観点から意識・状況・資源・取組という要素におきかえて質問と回答選択肢づくりを行った。

以上が、共通基本版を知的障害のある人のエンパワメントを目的に改良することにより、生活のエコシステム状況全体をみながら、知的障害のある人とソーシャルワーカーが協働で対話を行うことを可能にするためのコンピュータ支援ツール「知的障害のある人バージョン」の開発骨子である。

またアセスメント局面に特化した際のコンピュータ支援ツールの活用と機能を整理すると、生活支援に関するシステム化された

データの収集・認識を目標にした活用例としては、

- (1) ソーシャルワーカーの専門的視点からの入力・認識（面接、近隣や職場、組織や資源からの聴き取り、記録、メゾ・マクロシステムの関係資料など）
- (2) 利用者視点からの入力・認識（利用者・ソーシャルワーカー協働と自己観察）
- (3) データ比較によるデータ間の共通項と差異の認識
- (4) データの継続比較による変容状況の認識

などが可能であることを整理した。

一方で実際に知的障害のある人に関わる専門職に聞き取りや試用を行った結果、

- (1) 利用者の意識が認識できること
- (2) 比較によって利用者と職員との認識の差異に着目した対話が可能になること
- (3) 利用者のストレングスに着目できること

などの肯定的な成果を得ることができた。しかしながら問題点としては、

- (1) 回答項目が多すぎる
- (2) 回答までの手順が不明確なこと
- (3) グラフ化の解釈方法が不明瞭なこと
- (4) 知的障害の程度による活用方法が示されると望ましいこと

などが提起された。

そのため課題としては、コンピュータ支援ツール手順マニュアルの作成と使用についてのトレーニング・スーパービジョン体制の構築が必要であると考えられる。例えば回答項目の多さは、一度の面接やアセスメント場面ですべてを入力することによって生じる弊害である。ソーシャルワーク局面過程に応じた活用方法や支援計画作成への情報提供の例示などを含めたマニュアル作成と、それを活用したトレーニング・スーパービジョン体制が必要となる。

また量的調査によって質問項目の信頼性と妥当性を検証することである。コンピュータ支援ツールはあくまで手段であり、利用者の生活という質的なものを目に見える形で表現するために数値を用いているにすぎない。その数値も利用者の認識を理解するための手がかりとして用いられる。しかし一方で多様な角度からの支援ツールの検討も必要であろう。そのため統計帰納法に基づいた継続的な検証も今後の一課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕（計1件）

西梅幸治（2009）「エンパワメント実践における Perspective の検討—エコシステムと社会構成主義との比較から—」第56回日本社

会福祉学会、2008年10月12日、岡山県立大学

〔図書〕（計2件）

西梅幸治（2009）「過程展開へのコンピュータ支援」太田義弘編著『ソーシャルワーク実践と支援科学—理論・方法・支援ツール・生活支援過程—』相川書房、74-87.

西梅幸治（2009）「障害のある人をめぐる生活支援展開」太田義弘編著『ソーシャルワーク実践と支援科学—理論・方法・支援ツール・生活支援過程—』相川書房、142-156.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西梅幸治 (NISHIUME KOJI)

高知女子大学・社会福祉学部・講師

研究者番号：00433392